

第7回企画展「『登戸』再発見 ―建物と地域から追う登戸研究所―」記録  
関連イベント「証言会」  
登戸研究所で働いていた人に聞く登戸研究所の姿―15歳の戦争―

証言者（登壇順）

太田 圓次 氏（元陸軍登戸研究所第二科第一班勤務員）

岸井 三治 氏（元陸軍登戸研究所第三科北方班勤務員）

インタビュアー

渡辺 賢二（明治大学平和教育登戸研究所資料館展示専門部会委員）

司 会

山田 朗（明治大学文学部教授, 明治大学平和教育登戸研究所資料館長）

---

〔山田〕 みなさん、こんにちは。登戸研究所資料館長の山田です。本日は証言会にたくさんの方のご来場をいただきましてありがとうございます。この証言会は毎年登戸研究所資料館の企画展関連行事としておこなっております。今年の企画展は「建物と地域から追う登戸研究所」という設定で、3月末まで開催しております。今回の証言会ではその企画展に関係するお二人の方にお越しいただき、登戸研究所時代のことをお話いただくことになりました。

登戸研究所資料館に行かれた方も、そうでない方もいらっしゃいますので、登戸研究所について簡単にご説明いたします。登戸研究所は旧日本陸軍の秘密戦のための兵器・資材を研究・開発していた研究所です。秘密戦は防諜・諜報・謀略・宣伝が中心となっていますが、この登戸研究所は大きく分けまして3つのセクションからなっていました。第一科は電波兵器、これはレーダーや「く号」兵器の開発です。風船爆弾も第一科です。第二科は毒物・薬物・生物兵器、そしてスパイが使う様々な資材も開発していました。第三科は主として中国の蒋介石政権の偽札を製造していました。

本日お越しいただいた太田圓次さんは、風船爆弾の開発に参加をされました。太田さんは国民学校高等科を出て15歳でこの登戸研究所に入所し、最初に参加された仕事が風船爆弾の試射、試し射ちです。1944（昭和19）年2月に千葉県でおこなわれた風船爆弾の試射に参加された方は、太田さん以外に私達は確認できていませんので、非常に

貴重なお話です。風船爆弾の仕事が終わりますと、登戸研究所の第二科に移り、今度は毒物開発の責任者であった伴繁雄さんのもとの仕事をされています。

それからもうお一人、岸井三治さんは第三科で偽札の製紙部門、紙をつくる部門に勤務していました。ですからお二人のお話は、登戸研究所の第一科・第二科・第三科の非常に重要なところを聞ける貴重な機会になっています。

それではインタビュアーは渡辺賢二先生にお願いをして進めていこうと思います。よろしくお祈りします。

〔渡辺〕 大勢の方にお越しいただきありがとうございます。インタビューは私、渡辺がさせていただきます。今回の証言会のテーマは「15歳の戦争」です。15歳の登戸研究所ということになります。それはどういうことなのか、お二人の話を聞いてじっくりと考えていただこうと思います。

まず、お二人が働いていた登戸研究所内の場所について確認します。太田さんは風船爆弾試射の後に、今資料館になっている鉄筋の建物とほぼ同じ構造の建物で働いていました。第二科の建物です。これについて詳しくお話を伺います。

それから岸井さんは登戸研究所の北側、北方班で製紙をおこなっていました。偽札の印刷は南側の板塀で囲われ厳重に管理されている場所でおこなわれていましたが、北方班は偽札を刷るための製紙をおこなっていました。これについて詳しくお話を伺います。

それでは最初に太田さんからお聞きします。何年のお生まれでしょうか。

〔太田〕 1928（昭和3）年4月5日。

〔渡辺〕 1928年っていったらもうすぐ90歳ですね。登戸研究所に勤務したのは何年で、何歳の時ですか。

〔太田〕 1943（昭和18）年の4月1日に。15歳ですかね。

〔渡辺〕 ということで、今日のテーマの「15歳の戦争」です。ここに勤めて、最初はどういう身分だったのですか。

〔太田〕 入った時は見習い工員ということで一年間、午前中は学科を勉強し、午後から軍事教練をおこないました。軍事教練というのは、いかに有効に人殺しをするかという教練です。これは非常に過酷で、夏場は32℃位ある時に、防具をつけて銃剣術の練習をしますと、だいたい一割位、5人位は、何て言うんでしょう、水分が不足しちゃって倒れちゃう…。

〔渡辺〕 熱射病ですか。

〔太田〕 そういうような状況で、倒れると日陰に連れて行って水をぶっかけるんですよ。それで蹴飛ばしたり、ひっぱたいたりして気が付いたところでまた教練に入る。こういう過酷な仕事をしていたのです。

〔渡辺〕 そして翌年、1944年1月には、見習い工員の中から選抜された人を含めて、風船爆

弾作戦に動員されるわけですね。風船爆弾が全体の方針になってない時代、開発途上の時に行かれたわけですが、どこに行かれました。

〔太田〕 まず、1月に工作部隊というのが結成されました。見習い工員の中から16、7名の人  
が選抜されてその部隊に入りました。2月1日に国鉄の両国駅に集合しろという命令が  
あり、そこから外房線に乗って（千葉県）上総一宮まで行き、宿舎へは駅から歩いて行  
きました。その間、何をしに、何処へ行くのかということは全く説明されませんでした。  
私たちはただ後について行くだけです。でも、ふ号（風船爆弾）作戦部隊ということは  
大体分かっていました。というのは、（登戸研究所の）上の原っぱに教練場があり、そ  
こで毎日3mや5mの風船を飛ばしていましたから。それに爆弾を付けて飛ばすなん  
てことは考えもしませんでした。そういうことが毎日のようにありましたから、これ  
は何かあるのだなと、というような思いで集合して行ったということです。

〔渡辺〕 上総一宮ですね。実験場所はおどろき驚海岸の発射基地みたいなところですか。

〔太田〕 驚海岸というのは、宿舎から軍用車で約15分から20分位行ったところにある海岸で  
す。宿舎に着いて、そこで初めてこの部隊は何をするのかということ、10mの風船  
に爆弾や焼夷弾をつけてアメリカを攻撃するという、その場所が一宮の海岸である  
ということ、全部説明がありました。

〔山田〕 本番の風船爆弾作戦は1944年11月から始まりますが、今、太田さんが証言されてい  
るのは、その年の2月。まだテスト段階の風船爆弾試射、試し射ちなんですね。試し射  
ちの段階から、証言にありましたように爆弾を積んで飛ばしていたということです。

〔渡辺〕 翌日、2月2日にふ号の試射実験が初めておこなわれたのですね。この第一号の発射  
実験をしたのが太田さんたちということです。

〔太田〕 2月1日に両国へ集まって、上総一宮に着いて、宿舎に着いて初めてその仕事の内容  
を説明されたのです。翌日から実際に10mの紙の風船に水素ガスを入れて、最後に爆  
弾を装着して飛ばしました。その場所が驚海岸です。

〔渡辺〕 この時は何発位実験されましたか。

〔太田〕 最初ですから、何発かと言われても全然分かりません。10mの風船に水素ガスを入  
れるのに一時間位かかります。水素ボンベがありますね、50キログラムだそうですけど。  
それを一本ずつホースにつないで、「送風開始」という命令でガス栓を捻ると水素ガス  
が爆弾（気球か）の方へ送られるわけです。それが一本ずつですから、膨らむまでに時  
間がかかるわけです。ですから発射するまでに一時間位かかりましたからね。

〔渡辺〕 試射の段階ですからまだ数は多くないようですね。和紙の10mの気球、それを仕上  
げたということですね。爆弾も付けて実験したということですが、その時アメリカを攻  
撃するということを知ったわけですね。

〔太田〕 アメリカを攻撃するという事は、前日、着いた日に詳細な説明がおこなわれたわけ  
です。

〔渡辺〕 そのことを日本人は誰も知らない。他の軍隊の人も知らない。登戸研究所だけの開発  
途上の作戦に参加されたということですね。こういう体験というのは極めて貴重なこと  
ですが、それを15歳で勤務した人がやっていた。

実験をしていたのは、全部で何人位ですか。選抜された見習い工員17名位プラス何  
人位ですか。将校なんかも含めると。

〔太田〕 10mの気球は60kg位あったと思います。倉庫の中にある気球を解体して発射基地ま  
で4人で担いでいきました。他に水素ガスを扱う水素ガス班もいました。

水素ガスが30本位いつも置いてあって、それを一本ずつ風船に充填するので、非常  
に時間がかかった。風船が10m位上がると、そこに19本のマニラロープという麻のロー  
プがありまして、発射基地に常置してあるコンクリに金属の発射管がついていて、そこ  
に繋がっているわけですよ。繋がっているんですが、段々ガスが充填していくと風船が  
丸くなって上がっていきますね。ところが風が吹いたりしてなかなか思うように上がら  
ない場合もあるわけです。ですから、最後に爆弾や焼夷弾を私たちみんなで装着してか  
ら発射しました。ただその時に風が強いと横にこういうふうにな…。真っ直ぐ上に上がっ  
ていけないんですよ、私たちが想像しているように。横になったり、縦になったりし  
て。バサン、バサン、バサン、バサンいっている。

ガスは満球になるまで入れないんです。何故かという、5,000m、8,000m（上空に）  
いきますと空気圧が四分の一位に少なくなる。（空気が）薄くなると内圧で風船が破裂  
してしまいますから。そこで懸吊機けんちようきに調整する機械がありまして、そこから排気をして  
バランスを取る。バランスというのは砂袋なんです。2kg位の砂袋を一つ落とすと軽  
くなりますね。軽くなると風船が段々段々（上がっていく）。下降しすぎると内圧が低  
くなりますから、あんまり下がっちゃうといけないということで、5,000m位のところ  
から（砂袋を落として）また上昇していく、というふうな状態でね。バランスをとる調  
整機というものは非常によくできていたんですね。時間の関係がありますから、その辺  
のことは省きますけれども。

最初に風船を上げる時には、下には爆弾とかついていますから50kg、60kgの重みがあ  
ります。（風船が風を受けると）その衝撃でそれを吊るしてある19本のロープ、麻でこ  
きた非常に柔らかいが強靱なロープでしたね。それが3本も4本も切れてしまうんですよ。  
切れると、完全に横になっちゃう。上がろうとする水素ガスの浮力と、下にある50kg、  
60kgの爆弾の衝撃でもって糸が切れるんですね。その時多分風船も破れたのではないかと  
思うのですけれども、10m位上がって、それ以上、上がっていかない。横に流れてし

まう。茂原という都市の方へ流れていってしまう。そうすると、爆弾が付いていますから。後に現地の人が証言してくれたのですが、「俺ん家の柿の木に爆弾のついた風船が引っかけちゃってよ。シュウシュウ、シュウシュウって、どうしていいか分かんなかったんだよ。困っちゃって、どうしようかと思っているうちに兵隊さんが来て『タバコは吸っちゃいけないぞ』って怒鳴りながらその導火線を切ったり、爆弾を外したりなんかして処理していったよ。」と、その家の人が証言をしておりました。そんなわけで、最初のうちは何個飛ばしたか、どうなったのか、というのはなかなか難しかったですね。

〔渡辺〕 風船爆弾作戦が決まったのが（1944年）9月です。本当にこれでいくのか、という実験の途上でこうした体験をされたということです。その体験も3月には終わって登戸研究所にまた戻ってきます。戻ってきて配置されたのが第二科ということです。

〔太田〕 はい、二科一班です。

〔渡辺〕 太田さんが勤務したのは（二科一班班長の）伴繁雄<sup>ばんしげお</sup>さんと同じ鉄筋の建物ですね（資料3）。伴さんの部屋の反対側ですか、太田さんがいたのは。

〔太田〕 伴さんの反対側のところに私たちの部屋がありました。部屋といっても研究室ですけども、だいたい10個位部屋があったと思います。

〔渡辺〕 今の資料館とほとんど同じような構造だったそうですね。

〔太田〕 私たちの隣が何をやっているか、全く分からない。話もしない。ただ私らは伴さん直属の研究室ですから。伴さんの部屋に入ったり、色々話を聞いたりしました。伴さんの部屋には拳銃が20丁位ありましたよ。その他に色々なものがありましたね。伴さんは中野学校の教官、憲兵学校の教官でしたから。そういう研究、いわゆる謀略兵器の研究をやっていました、二科というのは。だから登戸研究所でも、二科は七班もあって。謀略兵器といいますと、長くなるんで省きますけれども、大変なことをやっていたんですよ。人殺しの兵器、あるいは動物を殺傷する兵器、あるいは植物を殺傷するとか、そういうふうなことをやっていた。

〔渡辺〕 太田さんの部屋ではどんなことをやっていたのですか。

〔太田〕（風船爆弾は）爆弾を投下した後、証拠隠滅のために、風船あるいは下にある懸吊機を爆破して無くすように作られています。証拠を無くすために、1kg位の爆薬が風船の途中に装着してあるんです。最後に爆弾を落した時、そこまで導火線が火を噴いてピューと伝わっていく。その導火線に爆薬が入っています。だから1秒で1m進む場合もあるし、2mの場合も、10mの場合もある。この導火線の実験を多摩川でやっていました。

〔山田〕 風船爆弾というのは爆弾を投下した後、自分も燃えて無くなる。そういう構造になっているのです。その構造は、今太田さんがお話になったように、ゴンドラ部分から導火

線が気球の方に延びており、その先に小型爆薬がついています。爆弾を投下すると導火線にも火が付き、爆発して証拠を無くしてしまふ。そういう装置ですね。そのことを今太田さんからご紹介いただいています。

〔渡辺〕 風船爆弾を作るのは一科ですが、二科は爆薬部分を担当していたのです。爆薬も色々なものを扱っていたようですね。多摩川などで実験をしています。伴さんの班とまた違う実験のようですが、どういう実験をしていたのですか。

〔太田〕 伴さんと私たちは全然違いました。伴さんは缶詰爆弾だとか、ショウカ（焼夷か）爆弾だとか、そういうふうな爆弾の実験を多摩川でやっていました。池永中尉という京都大学工学部を出た優秀な技術者がおりますが、伴さんたちと(1944年)3月まで実験をやっていたという証言をしています。私たちは4月から爆破実験を多摩川でやっていました。1kg位の爆薬を3m位の深い所で爆破させてみたり、地上で爆破を試みたり。あるいは導火線、水中でも濡れないで燃えていくような実験とか。あるいは発電機を通して爆薬を爆発させる実験など、色々なことをやりましたね。ただ、風船爆弾は偏西風に乗って高度8,000~10,000m位を飛んで行きます。時速200km位の速度で飛んで行くのです。そうすると温度は零下50℃位になっている。それでも導火線が消えないで燃えていくかどうかという実験は、民間の軍事会社の冷凍庫でやっていたみたいです。私たちは多摩川ですから。その実験は、想定はあったんでしょうけど、できなかったんですね。

〔渡辺〕 風船爆弾は冬に打ち上げますから、雪の中などに落ちることも想定していたわけですね。それでも証拠隠滅のため、気球を爆破する研究・実験をしていたのが、太田さんたちの班だったということが分かります。後でまたお話していただきますが、二科の建物についてもう少しお話を。

当時はお互いの班が関係していないから、ご存じないこともあるかもしれませんが。私たちが調べた30年位前までは残っていましたが、伴さんの部屋を出た辺りに地下への入口みたいのがありました。そこではどんなことをやっていた可能性がありますか。

〔太田〕 それは分かりません。私たちには全く分からない。これが伴さんの部屋ですか？

〔渡辺〕 ええそうです。入って一番奥。

〔太田〕 その反対側に私たちがいた研究室。向こう側に庶務班の部屋がありました。他にも部屋があるのですが、そこは何をやっていたか全く分からない。伴さん（研究室側）の一番奥の部屋には中島雇員という人がいて、これも優秀な技術者でしたが、ある時に「ガスが爆発するから逃げろ」と言われて、私たち逃げたんです。それで3時間位中に入らなかった。というのは、すぐに憲兵が来てね、周囲を近寄れないようにしちゃうわけです。中は防疫班みたいな人たちが来て全部整理したのでしょうか。帰ったのは3時間後。どうなったかなんて説明は全くなかったですね。

〔渡辺〕 私たちが随分前に調べた時には、この建物周辺は青酸ガスだとかそういうのをやっていた場所だという話をする人もいました。いずれにしてもここは、現代にも通じる、あらゆる謀略兵器の原点となるような研究をやっていた可能性があると言えるのではないかと思います。いかがでしょうか。

〔太田〕 その通りです。

〔渡辺〕 それでは、太田さんにはまた後で話してもらおうとして、今度は岸井さんにしばらく話をさせていただきます。岸井さんのお生まれは何年ですか？

〔岸井〕 私は1929（昭和4）年の10月。

〔渡辺〕 太田圓次さんの一級下ですね。ご兄弟も登戸研究所にお勤めだったと聞いていますが、いかがですか。

〔岸井〕 兄弟と言っても姉さんですから。仕事の話は家に帰っても全然しないですね。

〔渡辺〕 お姉さん二人とも登戸研究所に勤めたということですが、どこに勤めているかということも、家ではあまり話さなかったということですね。見習い工員として入所されて、すぐに三科というところに配置が決まるわけですね。

〔岸井〕 はい。

〔渡辺〕 三科の北方班ですけれども、北方班というのはどういうお仕事ですか。

〔岸井〕 入所したのが4月1日で。まず青年学校に入って、三ヶ月だけ青年学校にいました。太田さんと違って、私は青年学校がでたらめのようなもので。午前中は学科をしていましたが、午後は教官が国防軍曹とあって、登戸研究所に入った時には技術将校として入って来たいのですが、青年学校にまわされてしまったので気に入らない。だから午前中は学科やったのですが、午後は銃を持って原っぱで昼寝して。太田さんとは全然違います。それで7月、4月に入って7月に北方班に配属になりました。

〔渡辺〕 北方班は登戸研究所の北の方にあります。製紙工場だと思いますが、北方班の位置と製紙のお仕事についてご説明願えますか。

〔岸井〕 旧抄紙工場は私が入る1、2年前までは使っていたようですが、私が入ってからは試験機、試験的な仕事しかしていなかった。

〔渡辺〕 ほとんど使わなかった。仕事は新抄紙工場になるわけですね。

〔岸井〕 後で聞いた話になりますが、1942（昭和17）年頃この建物（新抄紙工場）が完成したそうです。登戸研究所でこの建物だけが2階建です。真ん中に明かり取りの天窗が付いている。ここだけが2階建なのです。私が入った時には偽札を作るという話は全然聞かされませんでした。上質紙を作るので、一応紙を作る工程を覚えなさい、ということでした。原料の選別から丸釜でパルプをつくる工程、パルプから製紙の機械に入る工程まで一週間程度だったと思います。

〔渡辺〕 新抄紙工場の2階のところですか。原料のボロを選別したりするのは。

〔岸井〕 はい、そうですね。ボロの選別は女の人たちが担当していました。何人位いたかな、私が入った時は20人位いたのですが。今のボロと違って、本当のボロです。洋服も麻とか、綿・コットンとかを選別しました。洋服のボロの場合は襟芯に麻が入っています。今はどうか分からないですけども、当時は麻が入っていた。その襟芯を、麻を取り出して、綿は綿、麻は麻で女の人たちが選別していた。ボタンも外します。

〔渡辺〕 太田さんがおっしゃった風船爆弾は、日本の原料である楮・三桎こうぞ みつまたを使った和紙でしたが、中国のお札はそういう楮・三桎じゃなくて麻系統、苧麻ちよまが必要だからこのボロを使っていたということですね。

〔岸井〕 はい、そうですね。ちゃんとした麻じゃなくて、川端に生えている苧麻っていう草です。その皮を煮てパルプにしたのです。

〔渡辺〕 選別する工程そのものが結構手間暇かかったのでしょうかね。

〔岸井〕 女の人を選別して、それを機械にかけてカッターで細かくします。細かくしたものを今度は地球釜、丸釜ですね。この丸釜が直径2m位だと思うのですが、それが2基ありました。左の地球釜にボロを詰めて、一日かけて蒸気で煮ましたね。その翌日、地球釜から原料を取り出します。取り出したものをビーターというところで漂白し、仕上がったものをビーターの下のドレナーという、コンクリの枡のようなものがあって、そこで一度水を切る。水を切ったものをまた上にあげて今度は右のビーターで、麻や綿の配合をオリジナルと同じようにしたのです。配合を同じにして、繊維の長さとか軟らかさを調整して、インク止めの、松脂をソーダで煮たものを混ぜます。オリジナルに合わせて色も少しつけました。それを初めて紙漉きの機械に流すという段取りです。当時は毎日紙漉きの機械を動かすだけのパルプが間に合わないわけです。ですから一日おきか二日おき位しか動かなかった。

〔渡辺〕 こうした製紙の機械は、ものすごい長網で、水もいっぱい使ってやる作業ですが、原料がないから1944年位までは一日おきに稼働させていた。ところが原料を大量に確保できるようになります。それは何故か。当時分からなかったそうですが、戦後、偶然の機会から三科の責任者だった山本憲蔵さんが、岸井さんの技術を見込んで転職を勧めた関係で、偽札の詳細を岸井さんが知るわけですね。そこで、この時期に製紙の原料が大量に来るようになった経緯を聞いたそうです。そのことをお話ください。

〔岸井〕 当時、日本が中国を侵略していると思ったアメリカやヨーロッパから、中国に支援物資として紙が多量に送られてきたそうです。その多量に送られてきたパルプというか紙を、後で聞いた話ですが、三科に関係している中国の児玉誉士夫が、香港でアメリカから援助物資として輸送されてきた紙を横取りしたそうです。横取りしたのか、お金で買っ

たのか、そのところはよく分かりませんが。それが三科に送られてきた。その紙をまた地球釜で煮直して、同じような工程をおこないます。今までボロからやってきたパルプと違って、すぐ紙になるわけです。紙を潰した物でまた紙を漉くのですから。そういうわけで、1944年の夏の終わり頃からだったと思いますが、「香港紙」が送られてきたのです。

〔渡辺〕 大量の「香港紙」を保管したのは、新抄紙工場前の倉庫ですね。

〔岸井〕 その倉庫です。

〔渡辺〕 倉庫がいっぱいになるほどの「香港紙」が送られてきたから、ここで毎日製紙できるようになった。偽札の大量生産が可能になった。

〔岸井〕 「香港紙」っていうのはね、最初から「香港紙」という名前ではなくて、児玉誉士夫が得てきた紙を、これは香港からきた紙だからと、私たちが勝手に呼ぶようになっただけのものです。しっかりした木の箱に詰められて。私、その頃日本は横文字が禁止されていたので、横文字すらよく分からなかったのですが、箱に横文字が印刷してあったので。だからアメリカから来たのだから分かりますけど。

〔山田〕 今、岸井さんがご証言していただいているのは、日本のお札の紙と、中国のお札の紙はだいぶ違うということです。中国のお札の紙は、先程のご証言にもありましたが、苧麻・亜麻という麻系統の繊維で作っています。日本にも苧麻・亜麻がないわけではありませんが、日本では三極などを使ってお札を作っています。そのため三極で偽札を作っても、原料の違いから、手触りで偽札であるとすぐにバレてしまうのです。ですから、原料から調達しようということになり、恐らく児玉誉士夫は偽札を使って原料を調達したと思われます。「香港紙」と登戸研究所で言っていた紙を登戸研究所に納品して、大量に、手触りの面でも見破られることがほぼない偽札を作ることができたということです。

〔渡辺〕 毎日水を大量に使うため、排水の事故も起きたそうですね。

〔岸井〕 紙漉きは、機械を止めた時に多量のごみが出るのです。そのごみをそのまま流すと、田んぼでも川でも真っ白になってしまうので、一応濾過槽を通して、繊維を沈殿させて上水だけを流すようにしていました。私なんか入所して一年かそこいらですから、「お前掃除してこい」ってわけで、溜まったヘドロみたいなものを外に出して掃除したことがあるのです。その掃除したものが山になっていました。山になっていたところに、大雨が降って、それが下の小田急線まで流れてしまった。それで一度小田急を止めたことがあるんですよ。

〔渡辺〕 そうした事故もあるということです。最後に三科北方班の集合写真を見てください（資料4）。岸井さんがいかに若いかが分かります。北方班の責任者である伊藤覚太郎さん

も写っています。女の人たちが結構いることが分かりますね。ボロの選別で女性が採用されたということが分かります。

これは1945（昭和20）年7月撮影ということは、もう敗戦直前ですよ。普段、伊藤覚太郎さんは登戸研究所にいなかったでしょう、当時は。

〔岸井〕 福井の方へ疎開していました。急に伊藤さんが来られて、写真を撮ることになりました。製紙の機械が動いていたので、この写真を撮った時には、機械を見ていた人がまだ5人位はいました。

〔渡辺〕 伊藤覚太郎さんは敗戦を知っていて、記念写真として撮ったのではないかと想像されるような写真です。しかも、北方班はこんな若い世代が支えていたという、大変びっくりする写真です。

あと、お札の関係で補足することはありますか。

〔岸井〕 私が登戸研究所にいたのは一年足らずで、本来なら話すようなこともありません。若くて、小僧みたいな年齢だったから。終戦後、向ヶ丘遊園に製紙会社が三つありました。山田製紙（山田紙業）と南武製紙と玉川製紙。1948（昭和23）年に、それまで家の農業を手伝っていたのですが、次男ですからいずれ外に出なくちゃいけないということで、南武製紙に入社したのです。南武製紙に入社して、登戸研究所で一年足らずでしたが機械を動かす要領はある程度心得ていたので、覚えるのが早くて。南武製紙では週刊誌のピンクとかブルーの紙をつくっていました。1950（昭和25）年朝鮮戦争があった時にアメリカ軍から要請がありました。朝鮮に紙を送る、紙が不足しているので協力しろということで、一週間か二週間位、朝鮮向けの紙を夜通し、女も男も協力したことはあります。そういうことで、登戸研究所には一年足らずでしたが、戦後、南武製紙に勤務した関係で紙のことに詳しくなりました。登戸（研究所）にいたことが基になり、ためになったのと、逆に登戸研究所を思い出し、一昨年から資料館にお世話になるようになりました。それまではほとんど登戸研究所のことを思い出したことはありませんでしたが、資料館にお世話になるようになってから、ぼちぼちと戦争中の登戸（研究所）のことを思い出す機会ができたということです。

〔渡辺〕 一年しかいなかったけれども、その技術が、基本が、南武製紙でさらに鍛えられて、山本憲蔵さんにもかわいがられるという形で、偽札について今は一番詳しく知っている人になりました。本当にドラマのような生涯をたどっている方です。

それではお二人にお聞きします。15歳で戦争に加わったわけですが、15歳で登戸研究所に入った時に、太田さんにまずお伺いしますが、入ったことを誰かに喋ったり、友達に話したりしたことはなかったのですか。

〔太田〕 入ったことについては、喋ることはできるわけですよ。登戸研究所、昔は実験場と呼

んでいたのですが、実験場に就職したのだと喋ることはいいと。喋ることはいいのだけれども、その中でどんなことをやっているのか、ということについては喋れなかった。軍事機密保護法というのがあって、しょっちゅう憲兵が来て、私服あるいは制服の憲兵が見張っているわけです。余計なことになります。私、御茶ノ水にある学校の夜学に通っていたんですよ、1944年4月から。ところが風船爆弾や過酷な教練などをやった関係で、肺浸潤<sup>はいしんじゆん</sup>っていう結核になってしまった。結核っていうのは（午後）3時頃になると熱が37℃から38℃位出て、非常につらいんですよ。それで「学校行きます」と言って家に帰って寝ていたんですよ。そうしたら3日目に憲兵が来たんですよ。普通は来ないわけでしょう。学校と研究所に連絡取って、私がスパイじゃないかと。自動車に乗って憲兵と登戸研究所の将校と二人で来たのです。学校行きますと言って出て、新宿辺りのベンチに座っていたら大変なことになっていましたけれど、私寝ていたでしょ。「ああ、やっぱり寝ているのか」と。翌日、研究所で軍医の診察を受けると肺浸潤<sup>はいしんじゆん</sup>ってということが分かって事なきを得たのですけれども。そんな状態で、この研究所の中のことを当時は全く語れなかったということですね。

〔渡辺〕 15歳で誰にも、家族にも話したことはないのですか。登戸研究所の中のことは。

〔太田〕 家族にも話したことはないです。話しても分からない。兄が二人兵隊に行っていますので、あとはお袋と親父、二人は百姓やっていたんです。ですから、あんまりそういうことには興味ない。興味あるのは給料だけ。話したことはないです。

〔渡辺〕 今、太田さんが言われたように、15歳で勤めた人は、ここはすごく条件が良かったと言うんですね。給料が良かった。資格を取りに学校に通わせてくれた。だから太田さんも学校に、夜学に通っていたわけですよ。その費用も登戸研究所持ちだった。

〔太田〕 私はね、日当80銭。初任給は28円。家は生田で農家の小作人でした。兄が二人兵隊にとられて。お袋と親父が百姓だと食うだけのことはできます。食うだけのことはできるのですが、現金収入はないわけですよ。それで私がここで働いて、初めてお袋に給料を渡した時には涙を流して喜んでいましたからね。そういう状態で、この村全体が本当に貧乏していた。戦争はこういうもので、兵隊に行っている人たちだけが苦勞しているのではなく、内地にいる人たちもこんな苦勞をしているのだということをしみじみ分かりましたね。

〔渡辺〕 岸井さんは勤めても、やはり家で喋ったりすることはなかったのですか。

〔岸井〕 そうですね、仕事について喋ったことはありません。ただ、私は長沢（川崎市多摩区长沢）の生まれですが、長沢の人たちは軒並みこの登戸研究所に、家族に一人か二人は働きに来ていた。私のうちは姉さん二人と私の三人。隣のうちは姉さんと私の同級生の二人。私の分家では同級生が一人。だから登戸研究所に勤めていることは誰でも知って

いるしね。ただ、仕事のことについては一切、口に出したことはありません。近所の人で、軍隊逃れて登戸研究所の守衛さんになった人が多かったですね。ですから、朝晩の守衛所を通る時にも「やあ」って手を振るだけで「おお」なんて感じで通れましたけどね。

〔渡辺〕 近所から結構働きに来ていた人たちがいた。15歳から勤めている人が大勢いたわけですから、この中で会うことも多分あったと思いますが、その時にどうだったですか太田さん。挨拶とか、会話とか。同級生も働きに来ていますよね。会っても話をしなかったのですか。

〔太田〕 同級生といってもね、私の同級生が8人位応募して、試験を受けて2人が落ちましたが。途中で会って「何をしているんだよ」と言われたって、「いや話をすることができないんだよ」ということだから。同級生だろうが知り合いだろうが、一切話はできなかったですね。

〔渡辺〕 そういう世界で、誰が何処にいるのかという話もできなかった。岸井さんの場合は1945年にまだ働いているわけですね。1945年4月29日に登戸研究所本部は解散して、長野とかいろんな所に移るわけですね。そうした疎開のことはご存知でしたか。閑散としたと思いますが。

〔岸井〕 1945年の春頃から、通勤している人がほとんどいなくなって。そういう時でしたね。三科の人は福井に疎開したんです。でも北方班は機械を動かすことができない。大きい機械なので。そのため北方班だけは疎開することはなかった。

〔渡辺〕 三科の北方班だけは疎開しなかったということですね。太田さんの場合は病気で辞めるわけですね。

〔太田〕 終戦が8月でしょ。7月に病気でもって「家で休んでいていいよ」ということで、軍医から。1ヶ月だけ家にいましたけど。

〔渡辺〕 それじゃあ、その前は。解散して二科も全部移動しますよね、伴さんとかも。そのことはご存知でしたか。

〔太田〕 いや。あんまり交流ないんですよ。ですからよく分かりませんでした。

〔渡辺〕 秘密だから、本当にバラバラ。食事なんかもお二人一緒にここで食べるなんてことはなかったでしょう。

〔太田〕 ないですね。食事もありましたが一食二十銭。二十銭だすとおにぎりがくるんですよ、黄色いおにぎり。お米とコーリャン（高粱、モロコシ）をすったやつが入っていて、非常にきれいなんですけど消化が悪いんで、出ちゃうんですよ。でも食べなきゃしょうがないし。お腹が空いているから食べる時はおいしい。それに福神漬けなんかがついて二十銭。でもやっぱりおいしかったね。風船爆弾飛ばしに行った時の食事はおいしかったけれど、ボラの小さいやつじゃないかと思うんだけど、毎朝出るんだけど、それが焼いて

ないんですよ。蒸かしてあって塩がかかっている。醤油じゃないの。ただ、お米は食べられましたね。力仕事だからね。少年ですから。やっぱりたらふく食べられました。研究所にはそんなわけで食堂はありましたけれども、別々に食べていましたね。

〔渡辺〕 あと、この弥心神社には何か思い出がありますか。太田さん。

〔太田〕 ありません。

〔渡辺〕 全然ないですか。あそこで戦勝祈願とかやらなかったのですか。

〔太田〕 ありません。

〔渡辺〕 岸井さんいかがですか。

〔岸井〕 戦勝祈願だか、年に一回の祭礼だか、時に神主さんが来られました。職場ではみんな仕事しているけど、「お前ヒマだから行ってこい」って言われて、私は一回行ったことがあります。

〔渡辺〕 正門の近くに講堂があって、色々な演芸会を、エンタツ・アチャコだとかいろんな人がきてやったという話も聞いていますが。いかがでした。

〔岸井〕 武道館があって、演芸会というか余興があった時に、三科と他になんかいたかもしれないけど、まあ登戸研究所全員ではないんでしょうね。そこでもってアチャコだと思うのですが、その他に漫才と腹話術と歌、アコーデオン弾いて。そういう余興を聞いたことがあります。

〔渡辺〕 太田さんは。

〔太田〕 私は関係ありません。働くだけです。

〔渡辺〕 本当に勤めた人によって、それぞれ違うのですね。科を越えて皆さんが集うということとは全くなかった、というふうに考えてよろしいですね。当時はどんな楽しみがありましたか。

〔太田〕 楽しみはありません。

〔岸井〕 北方班は大きいプールがあってね。そこへ南方班から夏の昼休みは泳ぎにくることはありましたよね。プールっていうのは、水道を引く前の、(抄紙)機械を動かすためのものです。紙漉きっていうのは水がすごく必要なのです。

〔渡辺〕 ここ(旧抄紙工場横)がプールですね。これ(弥心神社前)が貯水槽。

〔岸井〕 私が入った時にはもうそのプールはほとんど使わなかったから。泳ぐくらいにしか使わなかった。

〔渡辺〕 生田浄水場から引いた水の貯水槽ができて、こちらを使っていたんですね。

〔岸井〕 そうですね。

〔太田〕 余計な話をちょっとさせてもらいますと、お袋が時々お米を一升持たせてくれるんですよ。当時は食糧事情が悪いから、お米は本当に宝物なんですよ。それを所内で半分炊

いて、お塩、ゴマもちちょっとあったような気がするんですけど、それを食べるのが楽しみでね。半分は周囲の人が持って帰りました。私は当時ブドウ糖がいっぱいあったんです。爆薬の研究をするのにブドウ糖が必要だということで、ブドウ糖を持たせてくれる。それで守衛所に入る時は何にも検問がないんだけど、持って帰る時にはすぐ検査を受けなきゃいけない。それで士官が、何陸軍中尉とか少尉とかが、こういう理由で持ち出すからと書いてあれば、守衛は検査せずに通してくれる。ですから、多摩川へ実験に行きましたが、多摩川で飯盒のお米炊くのが本当に楽しみでね。

〔渡辺〕 太田さんは敗戦時、病氣療養中で登戸研究所にいませんでしたが、岸井さんはいらっ  
しゃったと思います。証拠隠滅命令が出て、何かしましたか。

〔岸井〕 北方班としては証拠隠滅のために、原料ですよ。原料を登戸の、なんていう会社か  
私も知らないのですが、南武線の向こうに小さい工場か倉庫があって、そこに荷物を、  
原料を持っていきました。あとは山田製紙（山田紙業）にもいくつか持っていったよう  
な気がします。当時、山田製紙は登戸研究所の分室ということになっていましたから。

〔渡辺〕 三科の北方班は証拠が残っても紙ですから、あまり咎められない。ところが南方班は  
偽札を印刷していますから。これはもう本当に大変だったようで、8月いっぱい延々と  
焼き続けたようです。部署によって証拠隠滅作戦も全然違うということです。

登戸研究所の隣に小学校があります。三田小学校ですね。当時、ここは崖だったんで  
す。四科に行くまでの間は崖でしたよね、昔は。

〔岸井〕 谷。

〔太田〕 谷戸っていうんですよ、昔は。山と山の間の谷を谷戸っていう。爆薬なんかをそこに  
貯蔵したり、加工したりする場合はそういう谷戸でなければできない。平場で爆薬の製  
造なんか絶対できない。桜ヶ丘の浄水場（川崎市上下水道長沢浄水場）の手前に、爆薬  
をつくっている火工廠（日本陸軍造兵廠火工廠多摩火薬製造所）という軍の爆薬工場が  
あったんですよ。そこもやっぱりこういう谷戸でね。今は明大のプールになっている谷  
戸にも爆薬倉庫があったんですよ。今もプールがあるかどうかわかりませんが。そこが  
爆薬庫になっていた。

〔渡辺〕 ここは今も谷戸ですが、道の向こう側も谷戸だったんですよ。今の三田小学校の辺り。

〔岸井〕 その辺まで谷戸だったね。

〔渡辺〕 ここだけが尾根みたいになって四科とつながっていた。そんな感じだったと思いま  
す。この谷戸に二科とか三科とかの秘密物資を証拠隠滅のため埋めて盛り土をしたって  
話がありますが。どうですか。

〔太田〕 先生、ここ（生田中学校の辺り）は四科じゃないのですか。

〔渡辺〕 四科です。四科に行くまでの道の左手が、今の三田小学校がある所が谷で、ここに埋

めたって。

〔岸井〕 崖下にね。三科でも南方班の人が、始めのうちは穴掘って現物を埋めたんですけど、紙ってというのは腐ることがないので、また掘り出して、北方班のボイラーで二週間近く南方班の人が来て燃やし続けました。昼夜を問わず、8月末まで燃やしていましたね。その燃やし屑が燃えずに半分位残ったまま飛んでいって、五反田（登戸研究所の西北地域）の町の人に見られて。お札が飛んできたって、そんな話になりました。

〔渡辺〕 それで多摩川に捨てに行くと、多摩川でもなかなか溶けずに残っているので海に捨てたとか色々な体験があるみたいですね。そんな形で証拠隠滅したのです。

最後に、時間ですから一言ずつ。解散の時に、登戸研究所のことは話すなという命令は出なかったようですが、戦後40年間皆さん誰も話さないで登戸研究所を守り通してきましたよね。それはどうしてなのか。太田さんはどうですか。喋りたくなかったのですか、それとも喋っちゃいけないと思ったのですか。

〔太田〕 喋っちゃいけないとか、そういうことじゃないんですよ。あまりにも世の中が変わりすぎちゃって。一生懸命、命を懸けてやってきたことが、終戦を境にガラッと色が変わっちゃった。人殺しのために俺たちは働いていたのかな、という風な意識が徐々に徐々に湧いてきてましてね。全くの空白地帯。あの時は少年航空兵の志願をしようとして、願書まで持っていったこともあったけど。要するに、とにかく国のために俺たちは働くんだけ、命を捨てるんだって。こんなに長く生きていたと思わなかった。だいたい二十歳くらいで俺たちの命は国のために捨てるのだという気持ちでいたところが、敗戦になった。逆に俺たちは世の中の、要するになんて言うんだろねえその…、悪いことをしていたのかなあ、と。そのギャップが酷過ぎて頭が真っ白になって、整理が付かないんですよ。15、6歳ですから。それでもって、ここへ行くのも来るのもトラウマになっちゃっていますから、嫌だったんですよ。ところがまあ、だいたい先生方に挑発されまして、来ることになりましたけれども。やっぱり話をして、戦争はやっちゃいけないんだよと、こんな被害があるんだよ、あんなに不幸になっちゃうんだよ、ということを語り継いでいかなければいけないのかなあ、という気持ちに最近はなっていますから。テレビ局や新聞社がだいたい来ましてね。映画にも、ドキュメンタリー映画3本も4本もつくってありますけれども。やはりそういうのが支持されて。この研究所の資料館が出来たってというのは新聞で見て知っていましたが、だけども来なかった。60何年も来たことがないんですよ。近いけれども。それほど衝撃が激しくて、人間は世の中変わるとこんなにもなっちゃうんだなと。だから戦争はやっちゃいけないんだよ、ということを皆さんに知っていただかなければいけない。伝えていかなければいけない。こういうふうな気持ちでしたね。

〔渡辺〕 それでは岸井さん。

〔岸井〕 私は太田さんとちょっと違って、太田さんのように風船爆弾とかに携わっていたのならしいのですが、偽札のなんて…。自分の口から出すにも、何となく喋りたくないですもん。自分から喋りたくない。喋れと言われても喋りたくなかったですね。だから北方班の人はそういう気持ちで、やはり喋る気にはならなかったと思うのですよね。

〔渡辺〕 岸井さんの場合は一昨年ですかね、初めて話すようになった。だからそれだけ、戦後70年近く沈黙をすることがあの戦争だったのだなと。特に15歳で勤めたのが70年間沈黙していたのは、そういう意味では一生懸命やったことも話せないっていうのは、相当な苦しみをお二人とも抱え込みながら今日に至ったのだと思います。

それではあと5分位ですので、ご質問があればお伺いします。

〔問1〕 2年位前に川崎平和館主催で、「かわさき巡回平和展」がその多摩区役所で開催されました。当時、登戸国民学校の生徒だった女性が登戸研究所のことについてパネルに書いていたのですが、その中に「噂によれば新型爆弾が研究所で研究されていて、実現すれば戦争が変わることもある」という一説があります。新型爆弾の噂が登戸であったということですが、お二人がこういう噂をお聞きになったことはありますか。

〔太田〕 それはありません。将校が「小型の爆弾を今研究している」ということは聞きましたが、ここではやっていません。

〔山田〕 登戸研究所は第九陸軍技術研究所ですが、第八で原爆の研究をやっていました。ですから陸軍の中でも研究はされていましたが、登戸研究所ではやっていなかったと思います。

〔渡辺〕 他にいかがでしょうか。

〔問2〕 偽札の原料を含めて、焼却が始まったが、終戦の15日ではなくその前日からだったと聞いていますが。

〔岸井〕 本当に焼却が始まったのは16日か17日です。それまでは焼却するという事まで頭が回らなかったようです。15日頃は穴を掘って埋めるということが主体でした。だけでもよく考えてみると、紙は何年たっても腐らない。重ねてありますから、水も通りにくい。そういうことで17日か18日頃から北方班のボイラーで燃やすことになった。燃やすことになってから埋めた偽札もまた掘り起こして、南方班の人がボイラーで全部焼却していました。

〔問2〕 終戦の前からじゃなくて終戦後だったのですか。

〔渡辺〕 終戦後です。15日の朝早く、国民が知る前に証拠隠滅命令がここに出されています。

〔問2〕 前日に出ていたという話を聞いたのですが。

〔渡辺〕 噂はあったかもしれませんが、証拠隠滅作戦は15日から始まりました。

〔岸井〕 上の人たちは終戦ということは何日か前に分かっていたのでしょけれども、従業員・工員は当日、天皇陛下の言葉を聞いてからその日に皆で、ですね。それまでは上からの

命令はなかった。

〔問3〕 玉音放送を聞いて終戦を迎えた人間としては、非常に興味深い話をありがとうございました。一つお伺いしたいのはこの仕事に就いた時の募集要項はどういう形で公募が出て、どういう試験を受けたのでしょうか。また箝口令を布かれた時に、口外すればこうなるぞ、という見せしめのような行為があったのかどうか。それからお給料がとても良かったそうですが、どれくらいよかったのか。その辺をうかがいたいのですが。

〔太田〕 給料は今でいえば12,3万から15万位じゃないですかね。学校ではここで何をやって、給料がいくらかというような説明はありませんでした。ただ、こういうところへ勤めていないと。徴用制というのがあってね、民間会社に勤めていると徴用令でもって強制的に徴用されて働かされてしまう。ですからここに来ていれば安心なわけですよ。そういうことで、この周辺の人達はここに勤めたというのが現状です。

〔渡辺〕 地域の人に聞き取りをすると、憲兵隊や登戸研究所の関係者が学校を訪問して、きちんと選別をして採用していたと考えられます。家が登戸研究所に送れば安心だということで、そこに送りこむ。と同時に秘密を抱え込む。そういう形で地域全体が登戸研究所の秘密を守るというシステムが、近所の人たちが勤めることによって完成した。これが秘密研究所の姿ではないかと私たちは考えています。

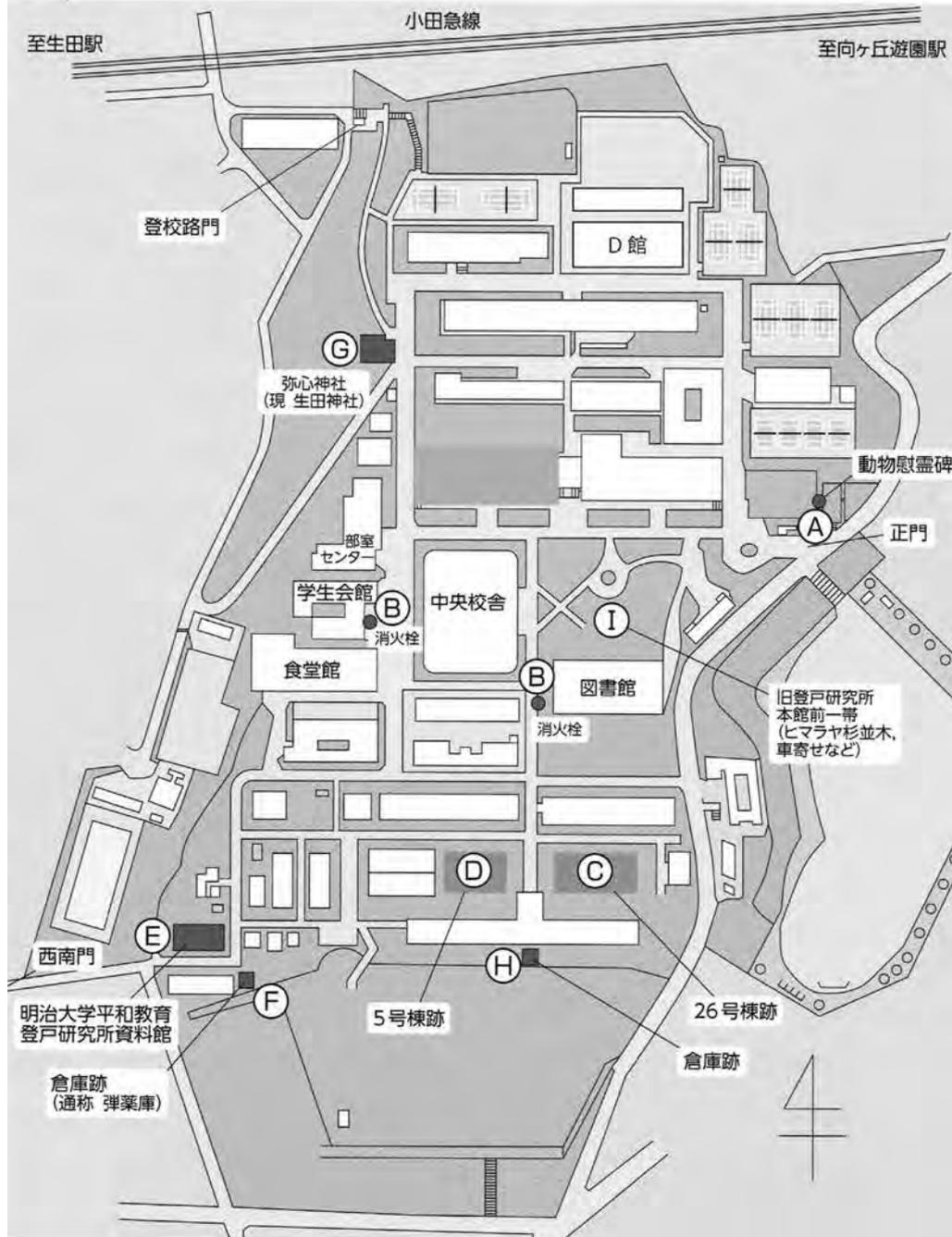
時間になりましたので、最後に山田先生にまとめていただきます。

〔山田〕 本日はご参加くださりましてありがとうございます。まだまだ聞き足りないという思いますが、今日はここまでとさせていただきます。登戸研究所とこの地域との関係は、まだ分からないことがたくさんありますので、日々資料館では聞き取り調査をし、それを活字化する作業も進めております。太田さん、岸井さんにはこれからも色々ご証言いただき、その結果を公開していきたいと思っております。どうも今日はみなさんありがとうございました。

### 〔追記〕

本稿は、2017年3月11日（土）に明治大学生田キャンパス第二校舎A館4階特殊プレゼンルームにて開催された第7回企画展関連イベント証言会「登戸研究所で働いていた人に聞く—15歳の戦争—」の書き起こしに加筆・修正したものです。本文中の（ ）内は資料館による補足です。

資料1 現在の明治大学生田キャンパス地図 (当館ガイドブックより)



資料2 1947年米軍撮影航空写真(USA-M452-A-112, 国土地理院所蔵)



資料3 太田圓次氏, 伴繁雄氏が勤務していた建物



枠部が伴繁雄研究室。(1989年, 木下健蔵氏撮影)

資料4 登戸研究所第三科北方班集合写真



後ろから2列目，左から2番目が岸井氏。前列中央が伊藤覚太郎。(1945年撮影，当館所蔵)